



写真提供：伊豆の国市

江戸幕末期に、これほどの進取精神があったことにまず驚く。オランダの文献を求め、いちから読み解き、鉄製の火砲を精造。時代が要請したこととはいえ、葦山代官江川英龍が中心となり緻密に計画設計され、幕府が築造したその軍事技術と日本伝統の匠の技の、まさに偉業ともいべき反射炉である。これらを足掛かりとしたこの分野の発展が、やがて日本の明治維新以後の国力に貢献し、国民の幸福に寄与してきたかは計りしれない。

あと15年早く生まれたかったと述懐した米山梅吉は、明治元年の生まれである。15年早ければ明治の御一新の土壌に立つことができたという米山の目と心に、この反射炉の光と熱はどのように映ったのだろうか。

葦山反射炉ご訪問の途次、新しい時代を切り拓いていこうとした進取の精神を感じに、米山梅吉記念館をぜひお訪ねください。

世界文化遺産に登録された

葦山反射炉

鎖国から開国へ。
葦山反射炉が
意味するもの。



「沼津よりの展望を遮れる伊豆の寝釋迦山の彼方は、源頼朝以来の史蹟にして葦山の名特に著はる。此地が駿、遠、豆、相、甲州に及ぶ所謂天領十八萬石の地を管した代官江川氏の居城であつたこと幾百年、累代の善政と武勇を以てして、家運の曾て衰ふることがなかつた。天下の治亂興る廢數なりし中に、超然として常に無敵の一國を形造り、殊に嘉永年間太郎左衛門英龍に至りて最も異彩を放ち、その卓絶せる才能識見は、幕末多事の秋に際して貢獻せる所眞に少からざるものがあった。江川の西洋兵學に明かなりしは、密に砲術に通じたばかりでなく、自から大小鉄砲の製法をも能くし、當時苟くも新式の兵法を講ぜんとした程のものは、皆な江川の門を叩きて教を乞ひ、天下を憂ふるの士亦來たり訪ふて其志を告げたのであった。(中略)彼の有名なる反射爐は、初め之を下田に設けんとしたるを、國防の見地より葦山城壘の邱背に移したるものといふが、其の尚ほ屹立依然たる、今に人の伊豆に遊ぶものをして畏敬の念を發せしむると共に、五州に跨がり名代官としての恩徳が神とまで崇められたこの英傑の跡を吊して、空しく感慨無限のものが存する。

(米山梅吉著『幕末西洋文化と沼津兵学校』より)
平成27年7月5日、世界遺産委員会で「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」として静岡県伊豆の国市(旧葦山町)反射炉の世界遺産登録が決定しました。この反射炉や江川英龍については、米山梅吉もその著書の中でとりあげています。
ペリー来航の1853年から約50年間に進んだ産業化に大きく寄与した歴史の物証として、米山の時代から、そしてこれからも私たちの記憶に刻まれていく大切な財産です。



米山梅吉著
『幕末西洋文化と沼津兵学校』

春季例祭 報告

米山梅吉記念館 春季例祭が開催されました

講演:「里はまだ夜深し -江川英龍-」
講師:NPO法人伊豆学研究会理事長 橋本敬之氏
アトラクション:コール・アルカディア(混声アンサンブル)



平成27年4月25日(土)、午後2時から春季例祭が開催されました。この日は春の日差しのふり注ぐ米山記念館に、地区内外から多くの方々がおいでくださり、和やかな中にも格調ある例祭になりました。

講演は「里はまだ夜深し-江川英龍-」と題して、橋本敬之氏により約1時間30分、江川英龍についてお話しいただきました。葦山代官・江川太郎左衛門英龍が生きた時代と葦山反射炉を作り大砲を鑄造した時代背景を、パワーポイントで図解しながら丁寧にお話しくださいました。

また混声アンサンブルのコール・アルカディアの合唱は、見事なハーモニーで、「花」や「ふるさと」、「赤とんぼ」など、馴染の曲も歌っていただき、その歌声に魅了されました。

引き続きの懇親会にも多くの方々が残られ、旧交を温めながら、和やかなひとときを過ごし、次回の秋季例祭での再会を約しました。

- 写真上/春季例祭式典
- 下左/講演される橋本敬之氏
- 右中/資料に目をとしながら講演をお聞きする皆さん
- 右下/コール・アルカディア(混声アンサンブル)の歌声に聴き入る

NPO法人伊豆学研究会 理事長

橋本 敬之

文化は地域の アイデンティティ

それぞれの地域にはその地域特有の文化がある。その文化は地域が長い期間かけて受け継いだものである。有形・無形に拘わらずその文化を映し出しているものが文化財として残されている。私たちが過去のことを知ることができるのは文化財が残っているからで、江川英龍の業績、反射炉のこともこれらを読み解くことから始まっている。江川文庫には膨大な史料が保管され、11年にわたる静岡県の調査によって7万点が目録化された。こうして江川文庫史料の概要が徐々に明らかにされ始め、その内容の重要性が認められるようになった。平成25年6月、調査したものの内、4万点近くの史料が重要文化財として指定され、これから、国民共有の財産として、さらに調査研究、保存のための仕事をしていかなければならない。江川文庫の史料は江川家に残されているからこそ価値があるもので、それぞれの地域に残された文化財もその地域に残っているからこそ価値が生まれるものである。葦山の地で、江川家がどのように代官としての仕事をしたか、なぜ英龍が海防を提案したか、ここを起点に考えることができる。

江川英龍の時代の 歴史的背景

英龍の活躍した時代はまさに内憂外患というべき状況であった。鎖国をしていた時代の外圧は相当のものであった。しかし、幕府



江川邸

は鎖国をしていて、安穏と政治を行っていた。「里はまだ 夜深し富士の 朝日影」と「富士山図」に賛を入れた英龍の時代の歴史的背景を概観したい。

ペリーが浦賀に乗り込んできたことで、初めて幕府は大変な状況に追い込まれたのであった。欧米諸国は、日本が身分制によって、とりわけ武士が国を守っているという認識があり、攻めることができない国であると考えていた。日露和親条約の交渉に来たブチャーチンと長崎での幕府のやりとりから、ロシアも正式な外交手段で日本との交渉を行った。ロシア側はいかに日本に開国させるか、日本はいかに国是である鎖国を維持するかという対談が読み取れる。この中で、鎖国がそれまでの日本の平和が維持されてきたようすを知ることができ、まさに武士が日本を守ってきたことが裏付けられる。

ロシア側の言い分の中で、ラクスマンが50年前に日本へやってきた時とは違い、欧米諸国の発展は大きい。日本が保有するどのよ



橋本 敬之 (はしもとたかゆき)

昭和52年 静岡大卒、静岡県下の公立学校教員を務める
平成20年 教員退職
NPO法人伊豆学研究会理事長、公益財団法人江川文庫嘱託学芸員
日本大学国際関係学部非常勤講師、伊豆の国市文化保護審議委員
著書「幕末の巨人 江川英龍」「江川家の至宝」、共著「静岡県の地名」「江戸時代人づくり風土記 静岡」「幕末の産業革命 葦山反射炉」
その他静岡県下の自治体史などを手がける。

な船でも蒸気船があれば抵抗することのむなしさ、また、蒸気船は風や天候に関係なく、どこへでも早く到着することができる、このような欧米諸国の産業の進化の前にいつまでも鎖国を続けることは不利益であることを説き続けるのである。しかし、幕府はそれに反駁し拒絶し続けるわけである。オランダも開国を勧め、アメリカのペリーの率いる艦隊が日本へ向かっていることの警告を出していた。幕府中枢部にはその意味がなかなか通じなかったのである。

欧米諸国はルネサンス以来、個人のアイデンティティを求め、個人の財産が保障される市民革命に発展し、さらに産業革命に進んで行った。これにより新たな市場開拓と資源を求め、海外進出を推し進めていた。

一方、国内では天候不順により天保の飢饉、各地で大塩平八郎の乱をはじめとする一揆、郡内騒動など村方騒動が多発し、内部矛盾を抱えていた。幕府は米本位制を採っていたが、実質経済は金本位に移行しつつあるなかで、米経済に固執する幕府は飢饉への対応ができなかった。

江川英龍の登場

ペリー艦隊は長崎ではなく、幕府の開港場を無視して鉄製の軍艦で浦賀へやってきた。安眠をむさぼっていた幕府の驚きは大きく、慌てた老中たちは対応を迫られても、1年の猶予を求めたのがやっとならぬ幕府の役職から外されていた英龍がここに登場することになる。

英龍は下田を管轄する代官であった。下田は海路から江戸に入るための咽喉にあたり、ここを防衛することが江戸を守ることだという海防案を幕府に提言する。英龍は蘭学を学ぶなかで日本の国防を考えていた。長崎の商人である高島秋帆が日本の国防を唱え、輸入した大砲の活用、銃陣等西洋式軍備を整えることを幕府に提唱し、江戸徳丸原で幕府首脳が高覧した。その結果、幕府として高島流砲術を採用することになったが、英龍が一人伝授の認可を得た。しかし、秋帆は密貿易で利益をあげていると嫌疑をかけられる長崎事件が発生し、処分されることになる。このような状況でも英龍は秋帆をかばい、高島流をとおした。

天保の改革の失敗による水野忠邦の退場、儒者で守旧派の鳥居耀蔵との確執による蛮社の獄が引き起こされたことによって、幕府から引いた英龍は、佐幕も雄藩もなく国防のため高島流を全国に広げていこうと葦山の私邸(江川邸)に塾を開いた。最初の門人となったのは佐久間象山であった。松代藩主真田幸貫が海防掛に任ぜられたことからたたくさんの藩士を送り込んだ。こうして葦山で直接指導を受けたものは280名となった。英龍没後江戸芝新銭座に開講した塾を含め将来の明治政府を支えた若者が4000人を超えて集まった。葦山では実践の場として山塾を行った。

このように後進の育成を図っている中でペリーの来航があり、再び幕府に呼び出されることになった。幕府には海防を考え、対応できる人物がいなかったのである。



高島流砲術訓練



明治5年兵部省引渡当時の反射炉

英龍は、佐幕も雄藩もなく国防のために、
葦山に塾を開いた。
最初の門人は佐久間象山であった。

台場建設と反射炉

英龍は天保13年(1842)下田を守ることに
よって江戸を守ることができると、幕府に建議
した。この提案は通らず、幕府はアヘン戦争
のニュースは伝わっていても他山の石と考
えていた。しかし、蘭学者の間では開国論が活
発に論議されていた。英龍は多くの蘭学者と
交わり、その危機の到来を危惧していた。べ

いた品川沖台場建設に着手した。そして、こ
の台場に設置する大砲製造を任される。当
時、世界的に銅が不足、高騰していたので、
大砲を鉄で製造することになった。反射炉の
建設、鉄の溶解、大砲製造まで一連の事業
の遂行責任者となった。台場は御殿山下を
除き当初11基の建設予定であった。これも
予算、工事期間の問題で6基のみの建設に
なってしまった。突貫工事で間に合わせるた
め、任侠大場の久八を駆り出し工事人工を
集める等大工事を完遂した。現在は第3台
場と第6台場が残っている。

反射炉は江戸湾防衛のための台場に設
置する目的であったので、当初下田に建設
を始めた。ところが、ペリー艦隊の下田への
入港によりペリー一行が建設現場に立ち
入ってしまう事態となってしまった。そこで、急
遽葦山に移転する運びとなった。また、現在の
製鉄システムの鋸鋳炉はなく、砂鉄から生
産された銑鉄を溶解して純度をあげる施設
の運用が行われることとなる。伊豆半島とは
いえ内陸部に建設する反射炉は、設備の充
実もさることながら、稼働に際して原料の搬
入、製品の搬出等の問題があった。これは
沼津から狩野川の舟運を使って川上げ、川
下げを行った。



反射炉

反射炉は元治元年(1864)廃炉となり、放
置されてしまうところであった。明治41年反

射炉保勝会が設立され、地元の方々を中心
となって土地を買上げ、それを陸軍省に寄
附することによって同42年に修復され、保存
されることになった。修復前の反射炉の写
真が残るが、これを見ると、まだ漆喰がと
ころどころ残っている。反射炉の煙突部分
の煉瓦は葦山中の粘土を使って焼いた。そ
の上に棕櫚縄を梯子状に巻き、さらに漆
喰で固めた。高温による反射熱を得る部
分の溶解炉におく煉瓦は河津で焼き上げ
た耐火煉瓦を使った。

台場、反射炉竣工を見ないで英龍は没
してしまっ。英龍は代官の職務に加え、こ
れら二つの事業を完遂することも大きな負
担となっていたはずである。しかし、幕府
を守るためだけでなく、日本を守るという
大きな志をもって事業に臨んでいた。こ
のような事業を遂行するだけでなく、さら
に嘉永7年(=安政元年、1854)に東海地
方を襲った安政の東海大地震への対応、
また、地震当時、日露和親条約締結のた
め下田港に滞留していたブチャーチン率
いるディアナ号の破損、修復事業も引き
受けることとなった。ディアナ号は結局
沈没して新造船であるヘダ号の造船事
業も手がけることとなった。英龍の肩に
これら事業が重くのしかかり、ついに最
後は過労死の引き金になってしまったもの
と思われる。

仕事と趣味のバランス

英龍は、代官として能吏であった。家政
改革をはじめ、郡内騒動の余波を受けない
ように対応、欧米からの脅威に敢然と立ち
向かう提言と実行は、当時、誰にも真似で
きえないものであった。しかし、彼の末
子である38代英武が「英龍を粗野な武人
というのは間違い」といっている通り、全
くの仕事人間ではなく、秀でた芸術家でも
あった。神道無



富士山画賛

江川が画いた
「里はまだ夜深し」
写真提供 江川文庫

念流の免許皆伝というばかりでなく、父
親に文学、音楽を学び、谷文晁に絵画、
大慶胤長に作刀、大坪詩佛に書、そして、
海防の元になった蘭学を幡野鼎に学び、
渡辺華山と交流を持つ等、すべてにわた
って一流であった。とりわけ、絵画にお
いては多くの作品を残している。その描
く絵は慈愛に満ちたものであった。

画家ではない英龍は作品に制作年を入
れない。しかし、没する前年の嘉永7年
に江戸の役宅でネコヤナギを描いてい
る。これが唯一といわれてよい年記の
ある作品である。7年はペリー来航に
対処している最中で、台場、反射炉の
建造に忙しい日々を送っていた時期でも
ある。こうした繁忙の合間に絵を描いて
いた。恐らく、このような趣味の世界を
持つことで精神的バランスを保っていた
ものと思われる。しかし、これら絵の中
にも、科学者のような観察眼を見ることが
できる。彼の描いた絵を集めて『日日公
余備忘』という書物に編纂したいという
方がいた。まさに、このような活動が
絵を描かせたのだろう。英龍には様々
な面があり、一言ではあらわせないのが
残念であり、また、素晴らしいところ
である。是非、英龍の魅力を多くの方
に知って欲しいものである。



伝 庵自画像

英龍は芸術家でもある。
文学、音楽を始め、神道無念流免許皆
伝、谷文晁に絵画、大慶胤長に作刀、
大坪詩佛に書、蘭学を幡野鼎に学ぶ。

明治42年改修後の反射炉

品川台場試発図

リー来航によってその心配が現実のものとな
り、老中阿部正弘に呼び出され、かねて提案
していた台場建設に着手することになる。

江戸の防衛ラインは三浦半島から房総半
島の富津岬と考え、ここに台場建設を提案
していたが、ペリーとの約束で回答まで1年
という僅かな期間と予算上の問題で、これに
ついての提案は通らなかった。そこで、意に
反して、すなわち、役に立たないとわかって

米山梅吉の遺徳を今に顕彰する 三井報恩会 旧西平内村特定振興村指定 80周年記念行事に 参加して



対談

彦部村と今回の西平内村が報恩会に改めてスポットを当ててくれました。

井口:平成27年6月21日、青森県平内町山口コミュニティーセンターにて、「三井報恩会旧西平内村特定振興村指定80周年記念交流会」という記念行事がありました。谷内さんは米山顕彰会の代表として、私井口は米山記念館の代表として出席しました。まず、この会の印象はいかがでしたか？

谷内:三井報恩会が長い間一般の方に知られていなかったが、昨年の彦部村に引き続き、西平内でも記念行事が行われたことは印象深いです。米山さんの業績の中で、三井報恩会の業績というのは意外に知られていない。その一つの原因は佐々木邦著『米山梅吉伝』で具体的な中身もほとんど紹介されていないことだと思います。

あのときに三井財閥がやったことについての戦後のある種の見方がある、表立って米山さんが三井をバックにやったということを書いていくことがあったと思います。佐々木邦

の『米山梅吉伝』は昭和30年頃に書かれたものですね。そういう中で彦部村と今回の西平内村が改めてスポットを当ててくれたということは、非常によいことだと思います。

井口:戦後、社会一般が財閥を避けようとする雰囲気があったのかもしれませんが。谷内さんが言われるように、一年前の彦部村に刺激されたということがあったと思いますが、今回の西平内での行事はよく準備をされ、地区総出でみんなが参加されたという感じでした。当時のことをもう一度思い出してみようという憧憬があったと思います。

谷内さんは『点描 米山梅吉』という本を刊行されています。米山さんにのめりこむきっかけは？

谷内:私が仕事をさせていただいた三井信託の創業者である、ということが一つ。そしてもう一つは私もロータリアンになっていたこと。佐々木の書いていることはそれとして、『梅吉伝』に書かれていないことを自分で書きたいと。ロータリーと三井信託と青山学院、それと、金融財政家としての米山さんを。たまたま青山学院はお取引先の関係で歴代の理事長さんと親しかったということもあり、米山さんのことを書くなら網羅的な情報を持っている自分しかないかなと思ったのがきっかけです。

三井報恩会の提供額は三千万円。今のお金で推定800~900億円です。でも実際の経済に与えた効果はもっと価値があったと思います。

井口:本を出されたのがもう十一年くらい前になりますが、記念館来館者が一番求めていく冊子です。

三井報恩会の話ですが、報恩会のこともお調べになられています。報恩会は昭和9年にできました。三井財閥が報恩会を設立して社会事業をやろうとしたいきさつは？

谷内:昭和7年の5・15事件のあった年、三井の大番頭團琢磨が暗殺されます。團さんは明治4年岩倉使節団で津田梅子らと留学しています。マサチューセッツ工科大学を出て鉱山学を勉強してきて、当時国営だった九州の炭鉱が民営化され三井に入ったときに三井に移られたのです。

井口:團さんは元は国営の石炭の会社にいたんですね

谷内:当時の技術では難しかった水揚げポンプを輸入して縦坑を作った。当時、石炭は日本の輸物物だったんです。まだ国内では石炭を必要とするところがなかった。三池の石炭がよかったこともあり、ほとんど上海へ輸出した。三井の仕事の中で、呉服屋、両替商の本体に払い下げにより三池炭鉱ができて、三池炭鉱の石炭を輸出する機関として三井物産ができた。鉱山と物産はあとからできましたが、三井の中では商業の三井の三本柱になった。その中心になったのが團さんです。渋沢栄一と言う人は日本の近代産業の神様みたいな人です。日本の世界にとって團は、渋沢と並ぶ人だと思います。で

も三井の人だったということで脚光を浴びていない損な面がある。

井口:渋沢は財閥という形ではなく、あらゆる面に産業を興し、一般受けしたということでもありますか。

谷内:團さんが殺された年に、血盟団というテロ組織に、犬養総理大臣も日銀総裁の井上準之助も殺された。昭和の激動の不況の中、財閥だけが儲けているということからあいつうことがあり、池田成彬が「これからの三井は儲けるだけではだめだ、従来以上に社会奉仕活動をやるべきである」と三井一族から三千万円の醸金を出させて、報恩会をつくった。**井口:**社会に対する貢献にもっと目を向けなければだめだ、という発想のものは池田成彬の主導が多かったでしょうか。

谷内:多いですね。**井口:**当時池田成彬は、商工大臣ですか？

谷内:いや、近衛内閣の大蔵大臣・商工大臣になったのは、この後三井を出てからです。その当時は三井高棟氏が社長で、その下に池田と米山が常務取締役、今のように会長がいて社長がいて副社長、専務というのではなく、社長の下は常務取締役。そして團さんは三井のホールディングカンパニーの総支配人です。

井口:その下にぶら下がっている銀行、物産などの組織体があったけれど、池田と米山は銀行の関係だった。三井報恩会を作ろうという

ことになり、昭和9年秋にできた。三千万円というお金を三井家が提供した。三千万円をは現金でお金が出たということではなく、銀行株で1200万円、信託株で800万円、国債で1千万かな。

井口:三井銀行株式20万株、三井信託の5万株、国債が800万でしょうか。

谷内:当時三井八郎右衛門高棟さんがトップで10くらいに分家がいる。その人たちが三井合名を作っていて、そこが三井の持ち株会社的な存在だった。そこから出したんです。

井口:本家だけが出したのではなく、三井の分家で力をあわせてでした、ということですね。決算をみますと、銀行株の配当、国債の利子などで年間120万前後の金が入っている。三井報恩会の方針としては元金に組み込んでいい、ということであったと思いますが、果実だけでも年間120万円の収入があった。

ところで、当時の3千万は今にするとのどのくらいかなとよく思うのですが？

谷内:三井不動産の社長・会長だった報恩会江戸英雄さんの本によりますと当時の一万円は3千万にあたる、3000倍。800~900億くらいと言っていますけれど、実際の経済に与えた効果としては、もっと価値があったと思います。というのは土地代も人件費も同じ建物を作るにしても昔のほうが安いわけで、病院を一棟作るというと、今だったら鉄筋コンクリート3階建てで何百坪とつくるけれど、当時はせいぜい木造2階建てで、延べ

坪300~400坪作れば相当立派な病院が作れた。そう考えると今の換算できないほどの経済効果はあったと思います。

江戸英雄さんがどういう根拠で3000倍といったかですが、人によっては一万倍という人もある。一万から五千倍の間くらいかなと。何をものさしにするかですよ。

三井報恩会が事業を始めましたが、主導したのは池田成彬ではないかというお話ですが、池田は初めから米山理事長が頭にあったという気がします。その理由は何だったのでしょうか？

谷内:三井信託を作って10年経ったところだと思います。米山は56歳で三井銀行を辞め三井信託を作った。大正12年8月、信託設立が翌13年3月。56歳で辞めたのも自分で定年を決めた。67歳まで約10年間三井信託をやります。



井口 賢明 (いぐちよしあき)

中央大卒 弁護士
平成1年 沼津北RC会長
平成5年 静岡県弁護士会会長
平成15年 米山梅吉記念館委員会 運営委員として記念館に関わる
平成17年 米山梅吉記念館 創立35周年記念誌『超我の人 米山梅吉の遺言』を編纂発刊 この編纂を通し多くの新事実を発掘した。
平成17年 米山梅吉記念館 常務理事に就任
平成21年 『藍莖俳句』編纂発刊 米山翁が所属した俳句の会記録集を発掘、編纂

谷内 宏文 (たにうちひろふみ)

昭和30年 小樽商科大卒
同年 三井信託銀行入社、丸の内支店長・大阪支店長などを経て代表取締役副社長
平成10年 三井信託銀行退社
東京日本橋RC、川口RCを経て現在東京日本橋プロバスケットボールクラブ会員
平成17年 『点描 米山梅吉』を出版 各地のRCで米山梅吉について精力的に卓話をしている



雨あがりの合間に外に出た。
米山ゆかりの長屋門からの石畳と木々の緑が
二人を包んで対談の余韻を漂わせていた。



報恩会の仕事は社会事業と文化事業。社会事業は主に疾病対策、文化事業は学術助成と農村対策です。

井口：三井報恩会は昭和9年の3月ですね。信託の社長が約10年。

谷内：タイミングが非常にいいですね。おそらく報恩会の理事長候補者ももう一人二人いるのです。それは、物産の安川さんという方と鉱山の牧田さん、そういう人が三井合名の理事としてしているわけです。当時のトップは團琢磨、その次が池田成彬、そして物産と鉱山から一人ずつ出て、米山さんが加わっていた。物産、鉱山に信託と。この3人の中でちょうど信託を辞められる米山さん、社会奉仕活動については大ベテランです。ということでタイミングよく米山が理事長になった。ここで銀行・信託の実業の部分を引退する。報恩会へ注力した。

井口：米山が「新隠居論」を書いたのが46歳の時ですが、考え方もマッチしていた。三井報恩会は社会福祉事業、ハンセン病、結核、など本来国が対処をする事業だと思えますが、それらについて、三井報恩会が自分で手がける。農村の振興も報恩会の事業の大きな柱になってきていると思いますが、このあたりの時代背景ですね。

谷内：報恩会の仕事は、大きくわけて社会事業と文化事業。社会事業とは大部分が当時の疾病対策です。その大きなものがハンセン病であり、がんの治療であり、結核、その他

の当時難病といわれたもろもろです。農村ですとトラホーム、寄生虫、庶民では性病、そういう難病対策を政府もいろいろ考えるわけですが、片方で軍備拡張の時代。あらゆるところで福利厚生予算といわれているような社会対策予算はどうしても削られるわけです。その中でかたや3千万というファンドを三井が出し、それに対する期待はものすごく大きかった。

文化事業は、大きく分けると学術助成と農村対策。農村では昭和の第一次世界大戦で景気がよかった後の反動としての恐慌と、昭和初期には東北中心に不作が何年間か続いた。それである種の社会不安があり、農村では娘を青原に売らなくちゃならないとなる。そういう時代背景の中で5・15のような事件が起きた。農村救済、政府もいろいろなことを考えるんです。しかし、お金がない。そのとき期待されたのが三井報恩会です。今回の西平内とか彦部村、とか、あと10箇所くらいありますが。

資金を出して助成しただけではなく、農村をよみがえらせようと精神的改革までやろうとした。

井口：綿羊導入とか振興についての事業はほかのところでもいくつかありますが、組織立ったソフト面まで含めた特定振興村は、この2つかと思います。事業の集約をしましたが、単に資金を出し助成をしましょうというだけではない。農村をよみがえらせようと、精神的な改革までやろうと、そん

なプロジェクトだったようです。2つの地区が選ばれたのは？

谷内：具体的にはよくわからないのですが、青森と岩手は貧農地区の典型的な場所だったんでしょ。青森は、米山さんと関係があったのでしょ。彦部についてはわかりませんね。
井口：あえていえば斎藤實総理大臣の出身地だったことでしょうか。斎藤實は東京RCの名譽会員でもあった。
谷内：なるほど。当時の青森県庁岩手県庁の知事をはじめ熱心な地元の人がいたことも選ばれた理由ではないでしょうか。

井口：国でも農林省でも農村振興をはからなければという計画があったんですよ。その中で青森は冷害に弱い、という機運はあった。そのためどうやってお金を工面するか、ということではなかなか進行しなかった。

谷内：ものの本によりますと、農林省が昭和7年に農村経済更生運動を始めます。各町村に経済更生計画を提出させて、集落の共同体に基づき挙村一致の体制で産業組合を活用しながら農村負債の整備と自立更生、村の立て直しを目的とする。農林省でも危機を感じていた。そのとき金匱として報恩会は非常に機能した、ということではないでしょうか。

井口：そこでその国の計画にのり、特定振興村というのが決められたような気もする。米山がすべて指揮するわけにはいかないので、そのなかで常務理事を連れてくる。

谷内：山口さん、報恩会のナンバー2



「村民の家」内にての記念写真



昭和16年に建立された西平内村振興記念碑の前で

を撮ったあのときね。

井口：東京は9日、10日には大阪に行っていますが、予定より3日遅れているというんです。米山さんは6日に来る予定で東京の行事が8日には終わる、それが終わって行けるということで2月11日を設定したのかとところが、ボールの来る船が嵐で3日遅れた。それで、山口が行ったのではないかと、余談ですが。

谷内：西平内は半漁半農、海にも近い。彦部は内陸。羊とかアンゴラとか大規模にいたったというのは、彦部ならやっていたける、という受け入れ態勢があったのではないかと。羊は彦部だけでなくあの周辺にいられているのです。おもしろいと思うのは、東北地方の一部にホームスパンの工場というか機屋さんが今でも残っている。ジギスカンが東北のいくつかの場所でグルメとしてやられている。これはおそらく、あの時いたった羊の伝統があると思うのです。

皮肉なことに戦後三井物産がオーストラリアから安い羊毛を輸入したために、日本の羊毛は高コストでだめになってしまった。今では限定的に飼っている程度でしょ。あれが戦後も続いていけば変わっていたのかな、と。

集会場と駅と学校と郵便局を作った彦部村に文化がいつへんに押し寄せてきたようなものです。

井口：米山さんと青森とは、本多州

一という方との縁があります。本多との関係は？

谷内：東京英和学校がそもそもですね。沼津から上京して勉強を始めたときに東京英和学校に入ります。当時本多は先生だったと思います。本当に結びついたのはサンフランシスコですね。明治20年渡米したときに、米山さんがサンフランシスコの宿泊所の福音会で指導を受ける。

井口：大正天皇と昭和天皇に侍従として仕えた珍田捨巳も津軽藩士の子ですよ。

谷内：この人も偉い。

井口：「珍田捨巳伝」のなかで、米山が書いています。

「珍田捨巳は、アメリカの留学から帰ってくると、青山学院その付属である銀座英語夜学校に教鞭をとられたので、わたしは青山学院の学生として親しく教えをうけた。その縁故で渡米の希望をもっていたので、珍田捨巳の添書をもって渡米した。」という米山自身の文章があります。また米山がサンフランシスコ滞在の時期、珍田がその領事として赴任していて、そこでも接触がある。

青森の西平内村は、やんちゃな村で苦労したような感じですが。彦部村は早く事業が完成しているように思うのです。青森市内四ロータリークラブが昭和55年に発行した「米山梅吉翁と青森県」には苦労話があります。

谷内：そこで、村民の統一のために集会所を立てます。

井口：村民の家ですね。

谷内：村民の家、これが非常に役立つようですね。長い間村が村長側と反村長側に分かれて、争っていた。道であっても挨拶しないと、仲間割れした時に、三井報恩会からの指導員を置いた。「村民の家」、当時1万円でしたか。写真を見ても二階建ての、昔の小学校より立派な建物。先ほどの計算でいくと3千万ですが、今だったら1億くらいかかるでしょ。この貧農にこんなものを造られたら、今まで喧嘩していても寄ってきますよ。ここでいっしょにやろう、という気持ちにさせたと思います。

谷内：それから駅と郵便局ができたこと。田舎では郵便局長と駅長さん、校長先生と駐在のおまわりさん、これが一番偉い。卒業式には必ずこの4人が来る。だから、町にとってはとびあがるほどの文化が急に押し寄せてきた。

井口：それまでは駅もなかった。学校も報恩会の事業の中で作られたようです。その中で各教室にラジオをつけた。

谷内：ラジオ放送が始まっていますからね。文化が一度に押し寄せたということですね。

井口：村民の家が記録を見ると村で一番大きい家で、190坪。工費が9500円、設備で500円、合わせて1万円、二階建てで50畳敷きの広間もあった。そこでお祝い事やお葬式までやった。昭和53年に焼けたということですが。



西平内郵便局

駅の開設や郵便局の開局、みんながまとまったということで政治的な力もできてそのようなこともできた。そして事業が完成を見、昭和16年、村民が振興の記念碑を作った。その揮毫を米山に頼みに行った。それが今でも残っている。ずいぶん大きなものです。

谷内：当時これだけのものを立てて残しておこうということになった、ということはすごいことですね。

井口：村民各戸がこの碑のために拠出した。村の人は喜んだわけですね。この石は仙台産の御影石。この横にいわれを書いてありましたね。

谷内：あれはロータリーでやったのですか？

井口：いや、そうではなく、記念碑と一緒に作られた。今回そのいわれを記した新しいものが見つかりましたが、それが写真のものです。平内には昭和14年に駅ができました。それまでは米山は浅虫温泉に泊ってそこから平内に行っていた。浅虫では行く宿が決まっていた、貴賓室みたいな部屋が定宿だった。今回見に行ったら、その旅館は現在なくなっていました。

米山に青森に行った時に詠んだ短歌があります。「北の国貧しき村をおとなへば花は咲きをり荒野原にも」趣のある歌です。

谷内：次は歌碑を作ってくれないかなあ。

「三井報恩会」とは

三井報恩会は、昭和9年(1934)に三井財閥の持株会社であった「三井合名」からの3,000万円の寄付金により設立された。初代理事長として米山梅吉が就任して、昭和20年までの約10年間に、学術・教育・医療・文化・農産業など様々な分野に支援・助成を行った。この10年間にを行った対象は、件数にして3,922件、金額にして1,750万円に及び、この種の公益財団が行ったものとしては、その内容と規模において「空前絶後」と言ってもよい程のものを残した。

医療と学術の分野だけでも、その代表的なものを示せば次の通りである。

- ◎ 全国のハンセン病療養所での新設病床3,575ベットとそのための病棟新設
- ◎ 結核療養所新設18カ所、拡充42カ所により5,000ベットの増設
- ◎ 理化学研究所、仁科芳雄博士の元素の人工転換と放射能の研究
- ◎ 大阪大学の合成繊維とタンパク質の研究
- ◎ 鈴木梅太郎博士のビタミンB1(オリザニン)の研究
- ◎ 結核の化学療法と新薬のための研究

などなど、昭和30年代以降の科学技術の発展と工業化の先駆となった多くの分野が、この支援によって進められた。

「彦部村」と「西平内村」とは

岩手県彦部村(現 紫波町)と青森県西平内村(現 平内町)で、それぞれ昭和10年から5年間にわたり行われた助成事業は、農村支援の代表的な事例と言える。両地区では、現在の「一般財団法人 三井報恩会」が設立80年を迎えたのを機に、当時の助成事業の内容と両地区発展への貢献を見直そうとの気運が高まっている。

旧彦部地区では、平成25年9月に、報恩会との交流を再開し、翌26年6月には、同地区公民館敷地内に「三井報恩会事業記念碑」を建立して、助成への感謝を後世に伝えることとした。旧西平内地区では、昭和16年に建立され、現在も立派に残されている「三井報恩会事業記念碑」の側に、「支援開始80周年を祝う記念碑」を新たに建てて、町を挙げての盛大な除幕式を行った。



平成26年紫波町に建立された碑



「いわれ」を刻んだいしづみ

杉浦正和様より資料の寄贈
原稿用紙に綴られた藍壺俳句と短歌集

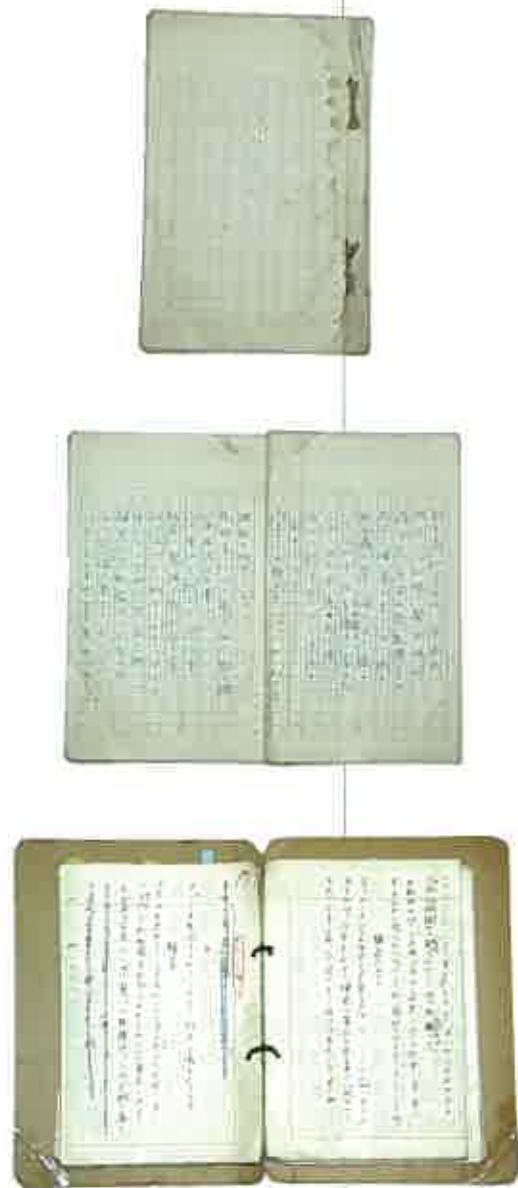
このたび、東京RC会員杉浦正和様より資料が寄贈されました。正和様令夫人友子様は米山梅吉の長女愛子さんの曾孫にあたられます。友子様の母堂安川花枝様は、生前祖父梅吉に連れられてロータリーのパーティーに行っていた、と話しておられたそうです。

寄贈された資料は、高木用紙という原稿用紙に綴られた「藍壺俳句」とココヨの原稿用紙に綴られた短歌集です。

「藍壺俳句」は「米山梅吉伝」の中の「俳句選集」に収められている274句の俳句が記されています。短歌集は、「米山梅吉選集」に収められている短歌（長歌五首含む）679首と、「選集」に未収録の23首が収められています。いずれも米山の直筆ではないようです。短歌集は、何人かの手によって書かれたものです。赤鉛筆で「半角アキ」「行別」などの文字やページが記され、また青鉛筆の取消線が入った短歌は「選集」では未収録になっているところから、「選集」を編集する際の元原稿になっていた可能性が考えられます。

杉浦様も「何故あのノートが母の手元にあったのか、母が亡くなった今となっては知る由もありません」とおっしゃってられます。来歴は定かではありませんが、米山ゆかりの品が記念館に届けられたことに、あらためて感謝申し上げます。

米山梅吉記念館は、平成31年に創立50周年を迎えます。この機会に、米山梅吉に関する知られざる資料を蒐集していきたいと考えています。書簡、原稿、写真、あるいは米山梅吉についてこんなエピソードを聞いた、など形になっていないものでも結構です。もし、皆様の周りで米山についてのこぼれ話を見つければ、ぜひ記念館までご一報ください。



米山梅吉が送った書簡も展示

土居光華書簡展

松阪市立歴史民俗資料館



土居光華曾孫の赤塚邦代さんにお話を伺う



土居光華に宛てた米山の書簡

平成27年3月17日～5月6日、パート2として5月17日～7月20日まで、松阪市立歴史民俗資料館において土居光華書簡展が開催されました。土居光華（1847～1918）は兵庫県淡路の生まれ。文筆家、翻訳家など言論界で活躍。三重県の郡長を務めた後、三重県四区から衆議院議員となります。

自由民権運動にも力を注いでいた土居は、前島豊太郎の攪民社から創刊された「東海暁鐘新報」にも参加し、新聞発行の一方で政談演説会も開いています。15歳の多感な時期にこの演説を聞いたと思われる米山梅吉は大きな感化を受け、東京に出奔して後、土居光華の書生になります。ここで、のちに三井銀行へ入るキーマンとなる藤田四郎とも出会っています。

今回展示された書簡は、土居光華の曾孫にあたる赤塚邦代さんが松阪市に寄贈したものです。200通以上にのぼる書簡は、伊藤博文、大隈重信、犬養毅、渋沢栄一、北里柴三郎、孫文など、当時の政治家や経済人と交わしたものです。

この中で、米山梅吉が土居に送った書簡も展示されていました。アメリカに渡る直前に書いたものには、新天地へ向かう高揚した気持ちと残される家族への援助のお願い、藤田四郎と連名の手紙、また、大正7年アメリカダラスで福島喜三次と会った時に詠んだ「メキシコの境まで行く枯れ野哉」「テキサスの野に東や初日の出」などもありました。

米山の土居光華宛の手紙は、記念館としても初めて知る資料でした。今回展示されていなかったものの中には、米山を名乗る前の和田姓でのハガキなどもあるそうです。今後、土居との関係や若い頃の米山を知る上での貴重な資料です。

今回の企画展は土居光華の書や、伊藤博文・孫文などからの書簡などが主に展示されました。

米山梅吉記念館 秋季例祭

お知らせ

多くの皆様のご来館をお待ち申し上げております。

[日時] 平成27年9月12日(土) 午後2時～

[場所] 米山梅吉記念館ホール

●講演

[講師] 小沢 一彦氏

2007-09年 国際ロータリー理事
公益財団法人ロータリー米山記念奨学会理事長

[演題]

これからの米山記念奨学会



●アトラクション

勝又 里乃さんによる
マリンバの演奏



●懇親会

講演者、参加者と一緒に懇親
登録料無料

米山梅吉研究に欠かせない一冊!

豊富な資料を駆使して読み解いた貴重な一冊です。
書簡や著作物などの資料を多数収録。

米山梅吉伝

米山梅吉の出生から晩年まで、
米山の同郷で青山学院の後輩で
もある佐々木邦氏によってまと
められています。

さらに、三井銀行、青山学院、三
井報恩会、ロータリークラブなど
の関係者、生前の米山と親交が
あった人達の証言を交えて、
様々な角度から光をあてて、米
山の人となりをうかがい上げてい
ます。「梅吉を知るにはまずこの
本からの1冊です。

和歌や俳句、漢詩など、趣味の人
米山の文藻も掲載しています。



佐々木邦著 青山学院初等部刊 A5判 上製本 ケース付き
本文590ページ 4,000円

日本のロータリークラブと
信託業の創始者

点描 米山梅吉

三井信託副社長を務めた著者
が、佐々木邦氏の『米山梅吉伝』
をふまえ、さらに新しい視点から
米山の人物像に迫った1冊。
特に、金融界での活躍や、『米山
梅吉伝』ではあまり多く語られな
かった三井報恩会の事業につい
て掘り下げ、奉仕の人米山梅吉
に迫る1冊です。
現在、一般書店では手に入らず、
米山記念館のみで取り扱い中。



谷内宏文著 新風舎刊 文庫判
本文369ページ 890円

購入ご希望の方は、書名、数量、お名前、連絡先をお知らせください。
商品が到着しましたら同封の振込用紙にて代金をお支払いください。
商品代金の他に、別途送料をご負担ください。

お申し込みは 公益財団法人 米山梅吉記念館
TEL:055-986-2946 FAX:055-989-5101

米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分
東名沼津ICより15分

[開館時間] 午前10時～午後4時

[休館日] ●月曜日
●12月28日～1月4日
●整理のための休館日(5月・8月の特定日)

米山梅吉記念館 館報
Vol.26 秋号

発行日/平成27年8月10日

発行者/公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長:渡邊 脩助

〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101

URL <http://yoneyama.umekichi.jp/> E-mail yumh@ai.tnc.ne.jp